



特許願(4)

昭和48年11月7日

特許庁長官 殿

1. 発明の名称  
 テカシカサシムドウトイ セイノウホウ  
 置換酢酸誘導体の製造法

2. 発明者  
 オオサカシヒガスミヨシコゾトチヨウ  
 大阪府大阪市東住吉区湯里町1の102  
 マエダ リョウゾウ  
 前田 量三 (ほか1名)

3. 特許出願人 郵便番号 541  
 オオサカシヒガシタシヨウマチ  
 大阪府大阪市東区道修町3丁目1番地  
 シノノギセイヤク  
 (192) 塩野義製薬株式会社  
 ヨシノ トシノブ  
 代表者 吉 利 二 雄

4. 代理人 郵便番号 553  
 大阪市福島区鷺洲上2丁目47番地  
 塩野義製薬株式会社特許部(電話06-458-5861)  
 弁理士(4703) 岩崎 光 隆

5. 添付書類の目録

(1) 明 細 書	/ 通	方 式 査
(2) 委 任 状	/ 通	
(3) 願 書 副 本	/ 通	48-125187

⑱ 日本国特許庁  
 公開特許公報

①特開昭 50-76072  
 ④公開日 昭50.(1975) 6.21  
 ②特願昭 48-125187  
 ②出願日 昭48.(1973) 11.7  
 審査請求 未請求 (全7頁)

庁内整理番号 7043 44  
 7306 44  
 6855 44  
 6855 44

⑤2日本分類

16 E431  
 16 E432  
 16 E433  
 30 B4

⑤1 Int. Cl?

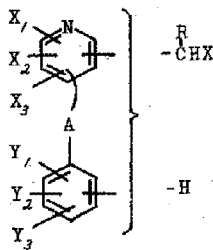
C07D 213/62  
 C07D 213/81  
 C07D 213/84  
 C07D 215/20  
 C07D 217/24//  
 A61K 31/44  
 A61K 31/47

明 細 書

1. 発明の名称  
 置換酢酸誘導体の製造法

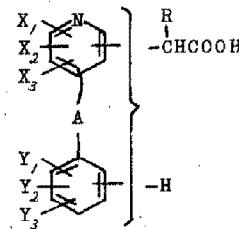
2. 特許請求の範囲

一般式



(式中、 $X_1$ ,  $X_2$ ,  $X_3$ ,  $Y_1$ ,  $Y_2$  および  $Y_3$  はそれぞれ水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシ基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、シアノ基、水酸基、アシルオキシ基、アシルアミノ基、トリフルオロメチル基、あるいはハロゲンを表わし、これらの置換基のうちの任意の2置換基が結合してピリジン環あるいはベンゼン環に縮合する脂環あるいはベンゼン環を形成してもよく、 $X$  はハロゲンを表わし、 $A$  は酸素あるいは硫黄を表わし、

$R$  は水素あるいは低級アルキル基を表わす。ただし上記一般式中の  $-CHX$  基は2個の置換基により形成されたベンゼン環上に存在してもよい。) で示される化合物をカルボキシル化反応に付して一般式



(式中、 $X_1$ ,  $X_2$ ,  $X_3$ ,  $Y_1$ ,  $Y_2$ ,  $Y_3$ ,  $A$  および  $R$  は前記と同意義を表わす。)

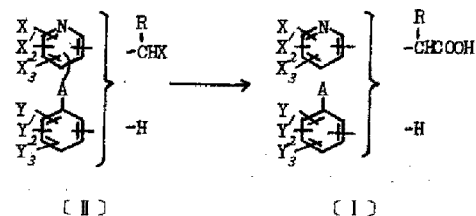
で示される化合物を得ることを特徴とする置換酢酸誘導体の製造法。

3. 発明の詳細な説明

本発明は置換酢酸誘導体の製造法に関し、さらに詳しくは優れた抗炎症作用(抗リウマチ作用も含む)および鎮痛作用を示し、医薬またはその合成中間体として有用な置換酢酸誘導体の製造法に

関する。

本発明方法の要旨は次式によつて示される。



〔式中、 $X_1, X_2, X_3, Y_1, Y_2$  および  $Y_3$  はそれぞれ水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシ基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、シアノ基、水酸基、アシルオキシ基、アシルアミノ基、トリフルオロメチル基あるいはハロゲンを表わし、これらの置換基のうちの任意の2置換基が結合してピリジン環あるいはベンゼン環に縮合する脂環あるいはベンゼン環を形成してもよく、 $X$  はハロゲンを表わし、 $A$  は酸素あるいは硫黄をあらわし、 $R$  は水素あるいは低級アルキル基を表わす。ただし、上記一般式  $-\text{CHX}$  で表わされる置換基は2個の置換基により形成されたベンゼン環上に存在し

てもよい。〕

本発明方法は一般式〔II〕で示されるハロゲンアルキル誘導体をカルボキシル化反応に付して一般式〔I〕で示される対応する置換酢酸誘導体を得ることを目的とする。

本発明方法の原料化合物〔II〕は対応するアルコール化合物をハロゲン化水素酸、ハロゲン化チオニルあるいはハロゲン化リンによつて常法通りハロゲン化することにより得られる。

この原料化合物〔II〕は一般式において示されるごとくアルキル基（例えば、メチル、エチル、イソプロピル、イソブチル）、アルコキシ基（例えば、メトキシ、エトキシ、プロポキシ、イソブトキシ）、カルボキシ基、カルバモイル基、ニトロ基、アミノ基、シアノ基、水酸基、アシルオキシ基（例えば、アセチルオキシ、プロピオニルオキシ、ブチリルオキシ）、アシルアミノ基（例えば、アルキルアシルアミノ、無機炭酸アシルアミノ、アリアルアシルアミノ）、トリフルオロメチル基あるいはハロゲン（例えば、塩素、臭素）か

字挿入

ら選ばれる同一または相異なる1~3個の置換基によつて各々ベンゼン環およびピリジン環が置換されていてもよい有機ハロゲン化合物である。

本発明方法の実施においては通常ベンジル型ハロゲン化物に対して用いられるすべてのカルボキシル化方法を用い得るが、その2、3を例示すると次のとおりである。

まず一例としてはハロゲンアルキル誘導体〔II〕のハロゲン原子をシアノ基に置換する。この反応は不活性溶媒（例えば、ピリジン、ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシド、 $N$ -メチル-2-ピロリドン、水、メタノール、エタノール）中シアノ化試剤（例えば、シアン化第一銅、シアン化ナトリウム、シアン化カリウム、ベンジルトリメチルアンモニウムシアナイド）を使用して通常加熱下に実施される。なお、ヨウ化ナトリウム、ヨウ素-ヨウ化カリウムを加えて反応の促進を図つてもよい。次いで得られたシアノアルキル誘導体のシアノ基をカルボキシ基に変換するため加水分解に付す。この加水分解は常法に従つて行え

ばよく、酸性条件下あるいは塩基性条件下のいずれでおこなつてもよい。酸としては塩酸、硫酸、硝酸、またはこれらと有機酸（例えば、酢酸）などとの混合物を用いることができ、塩基としては水酸化アルカリ、炭酸アルカリなどが用いられ、水あるいは含水溶媒の存在下で加熱することにより実施される。

さらに他の方法としてはグリニヤール試薬をカルボキシル化する方法がある。すなわち、ハロゲン化アルキル誘導体〔II〕に常法どおり金属マグネシウムを反応させてグリニヤール試薬をつくり、これに冷却下二酸化炭素を導入するかまたは固体炭酸と反応させ次いで加水分解に付すことにより目的とする置換酢酸誘導体を得られる。グリニヤール試薬の収率向上の為窒素気流中で反応を行うこと、ヨウドあるいは臭化エチルなどの添加剤を加えること、その他通常のグリニヤール試薬によるカルボン酸合成の反応条件は本発明方法実施の際にも同様に用い得る。

また、アルカリ金属化合物と炭酸によるカルボ

ン酸の合成法も利用できる。一般にはハロゲンアルキル誘導体〔Ⅱ〕にブチルリチウムを反応させてリチウム化合物とした後これに二酸化炭素を導入することにより目的化合物〔Ⅰ〕を得る。この方法においてブチルリチウムの代りにブロムベンゼンとリチウムまたは砂状ナトリウムアマルガムを用い得ること、二酸化炭素の代りに固体炭酸を用い得ることなども通常のアルカリ金属化合物によるカルボン酸の合成と同様である。

なおこれらのカルボキシル化反応中に変化を受けるピリジン環あるいはベンゼン環上の置換基はカルボキシル化反応前に適当な保護基で保護しておき反応終了後保護基をはずすこと、あるいは反応中に加水分解等の変化を受けた置換基を反応終了後再び修飾してもとの置換基にもどすことなども必要に応じて考慮されてよい。

本発明方法においては上記されたカルボキシル化反応に限定されるものでなく、一般式〔Ⅱ〕で示される化合物をカルボキシル化して置換酢酸誘導体〔Ⅰ〕にする方法をすべて包含するものであ

得る。アルミナカラムクロマトに付し、50%ベンゼン/ヘキサン溶出部より1.5gの6-フェノキシ-3-ピリジンアセトニトリルを得る。

$IR_{\max}^{CCl_4, cm^{-1}} 2240$ 。

本品2.0gに20%水酸化カリウム水溶液10mlおよびエタノール10mlを加え水浴上で1時間還流する。エタノールを留去後水を加えて希釈し、塩酸で酸性とした後重炭酸ナトリウムでアルカリ性とし、クロロホルムおよびエーテルで洗滌後活性炭で処理する。次いで塩酸でpH4に調整し塩化ナトリウムで飽和しエーテルで抽出する。抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去すると6-フェノキシ-3-ピリジル酢酸1.75gを得る。エーテル/ヘキサンより再結晶するとmp 84~85°Cを示す。 $IR_{\max}^{Mujol, cm^{-1}} 2500, 1910, 1720$ 。

#### 実施例2

5-フェノキシ-3-( $\alpha$ -ハイドロキシエチル)ピリジン5.2gを四塩化炭素20mlに溶解し-2~0°Cで三臭化リンの四塩化炭素溶液(7g/4ml)に20分を要して滴下した後さらに

る。かくして得られた置換酢酸誘導体〔Ⅰ〕はさらに分離、精製あるいは製剤化の必要に応じて、適当なアルカリ金属塩(例えば、ナトリウム、カリウム)、アルカリ土金属塩(例えば、カルシウム、マグネシウム、バリウム)、その他アルミニウム塩などに常法に従つて変換することが可能である。

本発明方法の目的化合物である置換酢酸誘導体〔Ⅰ〕およびその塩類は優れた抗炎症作用(抗リウマチ作用を含む)または鎮痛作用を示し、医薬またはその合成中間体として有用な化合物である。

以下実施例において本発明方法の態様を示す。

#### 実施例1

2-フェノキシ-5-クロロメチルピリジン1.388gをジメチルスルホキシド90mlに溶解し、55°Cでかきまぜながらシアン化ナトリウムのジメチルスルホキシド溶液(4.6g/45ml)を加え30分間反応させる。冷却後氷水を加え、エーテルで抽出し抽出液を水洗後炭酸カリウムで乾燥しエーテルを留去すると油状残渣1.27gを

20分間同温度で反応させ、次いで室温で一夜放置する。反応液を氷水中に投入し希炭酸ナトリウム水溶液で中和した後クロロホルムで抽出する。抽出液を乾燥後クロロホルムを留去し油状残渣として5-フェノキシ-3-( $\alpha$ -ブromoエチル)ピリジン6.5gを得る。本品は精製することなく次工程に用いる。

本品1.3gを新たに調製したテトラヒドロフラン10mlに溶解し、窒素気流中かきまぜながら-30°Cでブチルリチウム(1.46mmol)3.3mlを加え10分間反応させた後、乾燥炭酸ガスを2時間半導入する。冷却下に塩酸を加え複合体を分解した後テトラヒドロフランを留去し、残渣をエーテルで抽出する。抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去し、残渣に希重炭酸ナトリウム水溶液を加えて溶解しクロロホルムおよびエーテルで洗滌する。活性炭で処理後塩酸酸性としエーテルで抽出し、抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去する。酢酸エチルより再結晶しmp 35~35.5°Cの2-(5-フェノキシ-3-ピリジル)プロピオ

ン酸を得る。

5-フエノキシ-3-( $\alpha$ -クロロエチル)ピリジンを用いて同様の結果を得る。

IR  $\nu_{\text{max}}^{\text{Nujol}}$   $\text{cm}^{-1}$  2400, 1900, 1725.

#### 実施例 3

金属マグネシウム 4.52 ㍉を窒素気流中かきまぜながらテトラヒドロフラン 2 ml に懸濁し、臭化エチル 0.2 ml を加える。この反応液に 5-フエノキシ-3-( $\alpha$ -プロモエチル)ピリジン 1.48 g と臭化エチルのテトラヒドロフラン溶液 (0.8 ml / 1.5 ml) を 1.5 分を要して滴下し、次いで 1 時間還流する。さらに若干のマグネシウム残渣を認めるので臭化エチル 0.2 ml を加え 30 分還流する。次いで  $-15^{\circ}\text{C}$  に冷却して乾燥炭酸ガスを 3 時間導入する。10% 塩酸で複合体を分解し減圧でテトラヒドロフランを留去し残渣をエーテルで抽出。抽出液を水洗乾燥後エーテルを留去し残渣を希重炭酸ナトリウム水溶液に溶解し、クロロホルム次いでエーテルで洗滌する。活性炭で処理後塩酸で pH 4 に調整後エーテルで抽出。抽出液を水

洗、乾燥後エーテルを留去し、 $\text{mp } 130 \sim 134^{\circ}\text{C}$  の 2-(5-フエノキシ-3-ピリジル)プロピオン酸を得る。酢酸エチルより再結晶し、 $\text{mp } 135 \sim 135.5^{\circ}\text{C}$  の結晶を得る。

#### 実施例 4

5-フエノキシ-3-( $\alpha$ -プロモエチル)ピリジン 2.78 g をジメチルスルホキシド 20 ml に溶解し、 $55^{\circ}\text{C}$  でかきまぜながらシアン化ナトリウムのジメチルスルホキシド溶液 (530 ㍉ / 4 ml) を加え 2 時間反応させる。冷却後水を加えエーテルで抽出。抽出液を水洗、乾燥後エーテルを留去し、油状残渣 2.0 g として 5-フエノキシ-3-( $\alpha$ -シアノエチル)ピリジンを得る。

IR  $\nu_{\text{max}}^{\text{CCl}_4}$   $\text{cm}^{-1}$  2250.

本品は精製することなく次工程に用いる。

本品 1.2 g を 20% 水酸化カリウム水溶液 60 ml およびエタノール 60 ml の混液に溶解し、6 時間還流する。エタノールを留去後水を加えて希釈し、塩酸で酸性とした後重炭酸ナトリウムでアルカリ性としてクロロホルムおよびエーテルで洗滌

後活性炭で処理する。塩酸で pH 4 に調整し析出する沈澱を濾取、水洗、乾燥すると  $\text{mp } 131 \sim 134^{\circ}\text{C}$  の 2-(5-フエノキシ-3-ピリジル)プロピオン酸を得る。酢酸エチルより再結晶すると、 $\text{mp } 135 \sim 135.5^{\circ}\text{C}$  の結晶を得る。

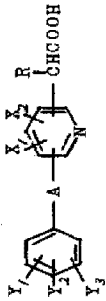
#### 実施例 5

実施例 1 と同様に反応を行い、2-(3-クロロメチルフェノキシ)ピリジンから 3-(2-ピリジルオキシ)フェニル酢酸、 $\text{mp } 110 \sim 111^{\circ}\text{C}$  を得る。

#### 実施例 6-95

実施例 1 と同様に反応を行い、下記の化合物を得る。なお下記表中で用いられる略号は下記の意味を表わす。

Me: メチル基	Met: メトキシ基
Et: エチル基	iso-Bu: イソブチル基
Ac: アセチル基	An: アミノ基
Ca: カルシウム塩	Al: アルミニウム複合体
d: 分解点	



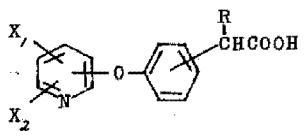
実施例	R	-CHCOOH の位置	R	A	X <sub>1</sub>	X <sub>2</sub>	Y <sub>1</sub>	Y <sub>2</sub>	Y <sub>3</sub>	mp (°C)
36	Me	2-0	H	H	H	H	4-OH	H	H	Ca. 187~189
37	Me	2-0	H	H	H	H	4-OAc	H	H	Ca. 132.5~133.5
38	Me	6-0	H	H	H	H	4-OAc	H	H	Ca. 145
39	Me	6-0	H	H	H	H	4-OH	H	H	Ca. 205
40	Me	2-0	H	H	H	H	4-NO <sub>2</sub>	H	H	115~116d
41	Me	2-0	H	H	H	H	4-NH <sub>2</sub>	H	H	132~133d
42	Me	2-0	H	H	H	H	4-NHAc	H	H	142~143d
43	Me	2-0	H	H	H	H	※	H	H	136~137d
44	Me	2-0	H	H	H	H	※ <sup>2</sup>	H	H	206~208d
45	Me	6-0	H	H	H	H	4-Br	H	H	119~120
46	Me	2-0	H	H	H	H	3,4-ベンゾ	H	H	138~139d
47	Me	6-0	H	H	H	H	4-CN	H	H	120~121
48	Me	6-0	4-Me	H	H	H	H	H	H	135~136
49	Me	6-0	2-Me	H	H	H	H	H	H	92~93
50	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	3-Me	H	115~116
51	Me	6-0	H	H	H	H	2-Cl	H	H	96~97
52	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	H	H	65~67
53	Me	6-0	H	H	H	H	3-Me	H	H	81~82
54	Me	6-0	H	H	H	H	3-Me	5-Me	H	120~121
55	Me	6-0	H	H	H	H	3-Me	4-Me	H	90~91
56	Me	4-0	H	H	H	H	H	H	H	145~146
57	Me	6-0	H	H	H	H	4-isoBu	H	H	77~78
58	Me	2-0	H	H	H	H	2-Me	3-Me	H	86~87d
59	H	6-0	H	H	H	H	2-Me	3-Me	H	120~121
60	Me	6-0	5-Me	H	H	H	H	H	H	107~108
61	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	5-Me	H	Ca. 195d
62	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	4-Me	H	Ca. 189d
63	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	6-Me	H	Ca. 202d
64	Me	2-0	H	H	H	H	3-Me	4-Me	H	123~124d
65	Me	2-0	H	H	H	H	3-Me	5-Me	H	103~104d
66	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	3-Me	5-Me	128~129
67	Me	6-0	H	H	H	H	2-Me	4-Me	5-Me	113~114

実施例	R	-CHCOOH の位置	R	A	X <sub>1</sub>	X <sub>2</sub>	Y <sub>1</sub>	Y <sub>2</sub>	Y <sub>3</sub>	mp (°C)
6	H	2-0	H	H	H	H	H	H	H	93~94d
7	H	2-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	152~153d
8	Me	2-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	119~120d
9	Me	2-0	H	H	H	H	H	H	H	98~99d
10	H	2-0	H	H	H	H	3-Cl	H	H	123~124d
11	H	2-0	H	H	H	H	2-Cl	H	H	133~134d
12	Me	2-0	H	H	H	H	2-Cl	H	H	107.5~108.5d
13	Me	2-0	H	H	H	H	3-Cl	H	H	84~85d
14	Me	2-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	110~111
15	Me	2-0	H	H	H	H	H	H	H	94~95
16	Me	6-0	H	H	H	H	H	H	H	92~93
17	Me	6-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	114~115
18	Me	6-0	H	H	H	H	H	H	H	Ca. 135~136
19	Me	6-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	Ca. 80~81d
20	Me	2-S	H	H	H	H	4-Cl	H	H	Me. 64~65
21	Me	2-0	H	H	H	H	4-Met	H	H	129~130d
22	Me	2-0	H	H	H	H	4-Me	H	H	101~102d
23	Me	6-S	H	H	H	H	H	H	H	114.5~115.5
24	Me	6-0	H	H	H	H	4-Me	H	H	98~99
25	Me	2-S	H	H	H	H	H	H	H	Ca. 140~141
26	Me	6-0	H	H	H	H	4-Met	H	H	Ca. 155
27	Et	2-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	92~93
28	H	6-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	116~117
29	Me	6-0	H	H	H	H	3-Cl	H	H	106~107
30	Me	2-0	H	H	H	H	4-CN	H	H	105~106d
31	Et	6-0	H	H	H	H	4-Cl	H	H	Me. 236
32	Me	2-0	H	H	H	H	4-COOEt	H	H	154~156d
33	Me	2-0	H	H	H	H	3-CF <sub>3</sub>	H	H	Ca. 155~157
34	Me	6-S	H	H	H	H	4-Cl	H	H	Ca. 150
35	Me	2-0	H	H	H	H	4-COONH <sub>2</sub>	H	H	160~162 (発泡) 200~201

実施例	R-CHCOOH の位置	R	A	X <sub>1</sub>	X <sub>2</sub>	Y <sub>1</sub>	X <sub>2</sub>	Y <sub>1</sub>	Y <sub>2</sub>	Y <sub>3</sub>	mp(°C)
68	3	Me	6-0	H	H	3-Me	H	4-Me	5-Me	5-Me	155~156
69	3	Me	6-0	H	H	2-Me	H	4-Me	6-Me	6-Me	135~136
70	3	Me	6-0	H	H	3,4-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	3,4-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	H	Ca. 169d
71	4	Me	2-0	H	H	2-Me	H	3-Me	5-Me	5-Me	125~126d
72	4	Me	2-0	H	H	3-Me	H	4-Me	5-Me	5-Me	126~127d
73	3	Me	6-0	H	H	2,3-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	2,3-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	H	Ca. 165~166d
74	3	Me	6-0	H	H	3,4-ベンゾ	H	3,4-ベンゾ	H	H	120.5~121.5
75	3	Me	6-0	H	H	2,3-ベンゾ	H	2,3-ベンゾ	H	H	131~132
76	3	Me	6-0	4-Me	5-Me	H	H	H	H	H	144~145
77	4	Me	2-0	5,6-ベンゾ	5,6-ベンゾ	H	H	H	H	H	Ca. 216~217
78	3	Me	6-0	4,5-ベンゾ	4,5-ベンゾ	H	H	H	H	H	122~123
79	3	Me	6-0	4,5-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	4,5-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	H	H	H	H	151~152
80	3	Me	6-0	H	H	3,4-(CH <sub>2</sub> ) <sub>3</sub>	H	3,4-(CH <sub>2</sub> ) <sub>3</sub>	H	H	122.5~123.5
81	3	Me	6-0	H	H	3-Met	H	3-Met	H	H	69.5~70.5
82	3	Me	6-0	2-Me	4-Me	H	H	H	H	H	Ca. 216d

※ / : 4-NHCOOH<sup>t</sup> ※<sup>2</sup> : 4-NHCOAH<sup>t</sup>

(以下空白)



理し、2-[6-(2-ピリジルオキシ)-2-ナフチル]プロピオン酸を得る。mp 197~198 °C。

特許出願人 塩野義製薬株式会社  
代理人 弁理士 岩崎 光隆

実施例	X <sub>1</sub>	X <sub>2</sub>	フェノキシ基 の位置	R-CHCOOH の位置	R	mp(°C)
83	H	H	2	3	Me	76~77
84	H	H	2	3	H	110~111
85	H	H	2	4	Me	129~130
86	5-CN	H	2	4	Me	198~200
87	5-CONH <sub>2</sub>	H	2	4	Me	211~212
88	H	H	3	4	Me	130~131
89	H	H	4	4	Me	180~181
90	3,4-(CH <sub>2</sub> ) <sub>4</sub>	H	2	4	Me	166~167
91	3,4-ベンゾ	H	2	4	Me	145~147
92	3-Me	4-Me	2	4	Me	153.6~156
93	4-Me	5-Me	2	4	Me	142~143
94	4-Me	H	2	4	Me	123~124
95	6-Me	H	2	4	Me	Ca. 273~275

実施例 96

2-(α-プロモエチル)-6-(2-ピリジ  
ルオキシ)ナフタリンを実施例1と同様に反応処

6. 前記以外の発明者

キンワダシ ヒガノオカチヨウ  
大阪府岸和田市東ヶ丘町808の55  
ヒロセ カツミ  
広瀬 勝己

手続補正書

(意見書に代えて)

7字削除

昭和48年12月6日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示 昭和48年特許願第125187号

2. 発明の名称  
置換酢酸誘導体の製造法

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 大阪府大阪市東区道修町3丁目1番地

名称 (192) 塩野義製薬株式会社

代表者 吉利一雄

4. 代理人

住所 大阪市福島区鶯洲上2丁目47番地

塩野義製薬株式会社特許部

(電話06-458-5861)

氏名 弁理士(6703)岩崎光隆

5. 拒絶理由通知の日付 昭和一年一月一日(発送日)

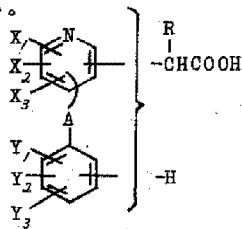
7字削除

5. 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄

6. 補正の内容

(1) 明細書第3頁の化学構造式〔1〕を下記のように訂正する。



(2) 同書第13頁下から6行目の「表わす。」を「表わし、-A-欄において例えば2-Oはピリジン環の2位がエーテル結合をしていることを表わし、X<sub>1</sub>, X<sub>2</sub>, Y<sub>1</sub>, Y<sub>2</sub> および Y<sub>3</sub> の各々の欄において例えば4-Cl は母核の4位をクロルが置換していることを表わす。以下の実施例においても同様である。」に訂正する。

(3) 同書第16頁末行の次に下記の文を追加する。

〔注：上表におけるカルシウム塩は実施例26の

それは $\frac{1}{4}$ 水和物であり、実施例25では $\frac{1}{2}$ 水和物、実施例34および39では1水和物、実施例63、70、73、77および82では1.5水和物、実施例18、19、33、37、61および62では2水和物であり、実施例36および38では4水和物である。〕

(4) 同書第17頁の表の下に下記の文を挿入する。

〔注：実施例95のカルシウム塩は1水和物である。〕

以 上

特許法第17条の2による補正の掲載  
 昭和48年特許願第125187号(特開昭  
 50-76072号 昭和50年6月21日  
 発行公開特許公報50-761号掲載)につ  
 いては特許法第17条の2による補正があったので  
 下記の通り掲載する。

Int. Cl.	識別 記号	庁内整理番号
CO7D213/81		7138 4c
213/84		7138 4c
215/20		7138 4c
217/24		7306 4c
H A61K 31/44		7306 4c
31/47		6617 4c
		6617 4c

手 続 補 正 書

(意見書に代えて)

9字削除

昭和55年 3月 22日

特許庁長官 殿

- 1. 事件の表示 昭和48年特許願第125187号
- 2. 発明の名称

置換酢酸誘導体の製造法

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 大阪府大阪市東区道修町3丁目12番地

名称 (192) 塩野義製薬株式会社

代表者 吉 利 一 雄

4. 代 理 人

住所 大阪市福島区鷺洲5丁目12番4号

塩野義製薬株式会社特許部

(電話06-458-5861)

氏名 弁理士(6703) 岩 崎 光 隆

5. 拒絶理由通知の日付 昭和 一 年 一 月 一 日(発送日)

特許庁  
 55.3.14  
 出願第125187号  
 山本

1行削除

5. 補正の対象

明細書の「特許請求の範囲」および「発明の詳細な説明」の欄。

6. 補正の内容

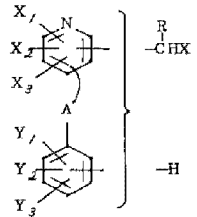
- (1) 特許請求の範囲を別紙のとおり訂正する。
- (2) 明細書3頁下から8行、6行、6~5行、4行および3行の「あるいは」を「または」に訂正する。
- (3) 同書4頁8行および末行の「あるいは」を「または」に訂正する。
- (4) 同書7頁1/1行および1/3行の「あるいは」を「または」に訂正する。

以 上

(別 紙)

2. 特許請求の範囲

一般式

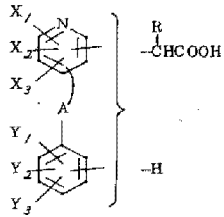


〔式中、X<sub>1</sub>、X<sub>2</sub>、X<sub>3</sub>、Y<sub>1</sub>、Y<sub>2</sub>およびY<sub>3</sub>はそれぞれ水素、アルキル基、アルコキシ基、カルボキシ基、アミノ基、カルバモイル基、ニトロ基、シアノ基、水酸基、アシルオキシ基、アシルアミノ基、トリフルオロメチル基、またはハロゲンを表わし、これらの置換基のうちの任意の2置換基が結合してピリジン環またはベンゼン環に縮合する脂環またはベンゼン環を形成してもよく、Xはハロゲンを表わし、Aは酸素または硫黄を表わし、Rは水素または低級アルキル基を表わす。ただし上記一



昭 55 6.14

式中の  $\overset{R}{-CHX}$  基は 2 個の置換基により形成された  
 ベンゼン環上に存在してもよい。  
 で示される化合物をカルボキシル化反応に付して  
 一般式



(式中,  $X_1, X_2, X_3, Y_1, Y_2, Y_3, A$  および  $R$  は  
 前記と同意義を表わす。)  
 で示される化合物を得ることを特徴とする置換酢  
 酸誘導体の製造法。

(以上)